

【平成23年度】

～「水が織りなす安曇野今昔物語」講座～

～豊科編～

第2回



と き : 8月20日(土) 午後7時から

演 題 : 【歴史文化遺産から安曇野の歴史をさぐる】

講 師 : 安曇野市豊科総合支所市民福祉課 課長

高原 正文さん

第2回「歴史文化遺産から安曇野の歴史をさぐる」 H23. 8. 20

1. 上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群

(1) 9世紀の須恵器焼成の窯跡 渡来系の工人の住居

昭和62年5月～11月、上ノ山のゴルフ場造成に先立ち、豊科町東山遺跡調査会によって発掘調査。須恵器窯跡17基、陶工たちが住んでいた住居(工房)跡が26軒分出土。土師器、黒色土器を焼成した土坑もいくつか見つかっている。

(2) 松本に移転した信濃国府との関わり

上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群は9世紀に上田から松本に移転した信濃国府との関わりがある。筑摩郡を土器の供給範囲としていることから郡の役人が生産にかかわっていた。

瓦当範(軒丸瓦の文様の型)は木製が普通だが土製のものは千葉県香取市コジヤ遺跡出土例に次いで2例目。円面硯は国府の役人が使うために焼かれていた可能性をもつ。

2. 住吉庄時代に開削された縦堰

○『和名類聚抄』(源順<したごう>著、日本最古の漢文の分類百科事典、930年代に完成)に安曇郡の四郷として高家郷、八原郷、前科郷、村上郷が出てくるが、平安時代中期以降、高家郷が住吉庄に、八原郷が矢原庄に変転した。

(1) 縦堰とは何か 扇状地の扇頂から扇端への高低差を利用して等高線と直角に開削した堰。多くが中世までに開削。平安時代から鎌倉時代の庄園開削は自然流のほか、この縦堰による。比較的流れが速く、枝堰を分派してもあまり広大な範囲を灌漑できない欠点をもつ。縦堰の例として梓川扇状地を流下するものは立田堰、温堰(ぬるせぎ)、庄野堰、真鳥羽堰(成相堰)、中曽根川、飯田堰。烏川扇状地を流下するものは田多井堰、堀金堰、矢原沢、穂高沢、牧堰。中房川扇状地を流下するものは油川がある。

(2) 飯田堰 中世以前に開削。梓川から取水の中曽根川の支流として開削。当時、樽木川が梓川の本流で、今の梓川はその支流。

昭和27年に下飯田諏訪神社近くの宮前遺跡から土師器出土、上飯田古宮付近の三ツ箴地籍から平安時代の須恵器出土。

(3) 成相堰(真鳥羽堰) 住吉庄の幹線水路のひとつ。梓川を岩岡で取水。→ 真々部、鳥羽、成相を潤す。

(4) 住吉庄 豊科のほぼ南半分は住吉庄に所属。住吉庄は後院領から後白河法皇が設定した長講堂領へ。住吉庄の開発領主は西牧郷の北条に居住した西牧氏である。鎌倉時代以降、一族の大妻氏や二木氏を派出し、住吉庄を開発。

3. 細萱氏館跡

○館主細萱氏は矢原庄の庄司であった中世の豪族。

(1) 居館の遺構

① 史跡指定 戦前は県指定史跡。豊科町指定史跡。安曇野市になって所有者の意志により未指定。

② 位置 安曇野市豊科南穂高の殿村に位置。

③ 規模 本郭20間四方、内側に土塁形成。394坪。東隣に二の郭。二の郭の東に持仏堂の薬師堂がある。南隣に万水山常光寺(真言宗)があった。堀は万水川に通じている。万水川は等々力地籍(穂

高)で犀川に通じており、このことから舟運の便があったようである。館の四周に方1町の小路がめぐらされており西小路、南小路は一族家臣百姓等の屋敷地であった。

(2)安曇氏衰退の後、安曇郡南部の支配者

①『和名類聚鈔』の記述

穂高神社の位置する郷名を安曇郷とか穂高郷とかせず、八原郷としている。安曇氏衰亡と大伴氏(細萱氏)の進出を暗示。

(3)矢原御厨開発 矢原庄

①後院領 保元二年(1156)平正弘領から後院領。『吾妻鏡』文治二年(1186)乃貢未済庄々注文に「院御領野原庄」とある。『神鳳鈔』(建久四年<1194>)によれば「内八 矢原御厨 千八百九十一町」(2,205ha)とあって伊勢神宮領であることがわかる。近世初頭の穂高組、松川組、池田組の田畑面積 2,395 町であることから、この範囲をそのまま踏襲したと考えられる(『南安曇郡誌 第2巻上』による)。

(4)穂高神社造宮の大旦那

①『三宮穂高社御造宮定日記』→穂高神社御遷宮の造宮奉仕の諸役分担を決めた日記。

細萱氏は武田氏の進出以前は穂高神社造宮の大旦那を務めた。

(5) 仁科氏の進出と細萱氏の有為転変

□武田氏支配中はその傘下、武田滅亡後は小笠原貞慶に帰属。安曇郡にあって寄親として多くの寄子・同心・被官を抱え、行政面では郡奉行を務め、軍事面では侍大将(組頭)として活躍。

□近世になって慶長年代には郡奉行の地位を退き石川家の家臣渡辺氏、青山氏に職を譲った。本家は慶安検地帳では姿を消したが、小笠原貞慶の足軽大将を務めた分家の細萱彦左衛門は慶安検地帳に耕作地 10 町歩余が見えている。

4. 田沢城址・光城址・上ノ山城址

(1)海野氏進出と会田御厨の設定

①系図

(真田系図) 『寛政重修諸家譜』所収

幸広(木曾義仲に属し備中国水島合戦討ち死)

↓

幸氏(義高の伴して鎌倉下向、義高没落、時忠勤被召捕、頼朝却而感之、賜海野本領)

↓

幸継

↓

幸春(真田の祖) 小次郎 会田 三郎 塔原 四郎 田沢 五郎 借屋原 光之六郎

②近年発掘された殿村遺跡(松本市四賀会田)

海野は小県郡、会田は筑摩郡のそれぞれ海野氏の本拠であり、こうした地域・郡を異にした地方が諏訪上社大宮の御門屋の造宮諸役を果たしていることは、それが海野氏の諸領であったからに

ほかならない。

③会田神明宮の御厨とは何か 麻績御厨、仁科御厨

御厨は伊勢神宮領。会田御厨は会田神明宮を開拓の拠点とし近世の田沢村、光村、塔原村、明科村の範囲。

(2)田沢城、光城の築城の意味

①東信勢力の前線の出城的な意味合い

②東信へ向かう尾根道沿い

□尾根道沿いに海野氏一族である苅谷原氏の苅谷原城(そこは国道 143 号の苅谷原トンネル上の城山に立地)、塔原氏の塔原城に連絡していた。

□尾根道は交易の道として活用。光城山にも津島社(市神)が祀られていた。

(3)田沢氏と田沢神明宮

①神仏混淆 大日如来 天照大神(伊勢内宮、太陽神) 神宮台には円満寺という名の神宮寺が存在、武田信玄の兵火により焼失(寺が焼かれるわけは何か)。

②会田御厨の前線的な位置づけ

(4)戦国時代における海野氏の状況(『南安曇郡誌 第2巻上』による)

①筑摩郡の嶺間・川手筋に繁栄した海野氏の一族は、大塔合戦以後その名がしばらく見えないが天文二十二年(1553)武田晴信が来攻した際、再び現れる。『高白斎記』によれば、武田勢の海野氏諸城の攻撃の様子を次のように記している。

(天文二十二年三月) 己巳(つちのとみ) 午未刻、向ニ丑方一(武田晴信)御出馬、二十九日乙亥(きのとい) 深志を御立、午刻苅屋原へ御着陣、晦日城の近辺被ニ放火一、四月小、朔日丁丑(ひのとうし)、二日戊午(つちのえうま) 刻、苅屋原ノ城被ニ攻落一、城主長門守生捕、酉刻ニ晴望ニ塔原ノ城自落一、三日己卯(つちのとう)、会田虚空蔵山迄放火、苅屋原ノ敵城を割、酉ノ刻向ニ寅ノ方一御鎌立、○中略 八日甲申(きのえさる) 苅屋原ノ城主今福石見守被ニ仰付一

②海野氏の一族はその後武田信玄に従って永禄十年(1567)八月小県の生嶋足嶋社で神前起請文を書いて信玄に忠誠を誓っている。

③天正九年(1581)の御祓くばり日記(伊勢内宮御師宇治久家『信濃国道者之御祓くばり日記』)〔略〕をふりかえって〔略〕海野の後裔とされている田沢の花村若狭、光の大和は当時塔原氏の被官になっていたことが想像されるのである。

④田沢・光が塔原氏の支配下に入ったのは天文二十二年(1553)三月武田氏が当地方を支配するようになってからのことで、それ以前には苅屋原城主太田氏の支配するところであった。

⑤『信府統記』によれば、苅屋原城主についてつぎのように記述されている。

当城ハ昔海野小太郎幸継ノ五男苅屋原五郎ト号シテ苅屋原反町(そりまち)辺ヲ領セリ、其子孫幾代ニシテ断絶スルニヤ詳ナラス、其後太田弥助ト云者居城セリ、是ハ武州太田道灌(どうかん)ノ一族ナリ、当国へ来リ、小笠原ニ属ス、大永三年(1523) 癸未(みずのとひつじ) 年ヨリ当城主トナリ、七百貫ヲ領シ、小笠原家一ノ大身タリ、苅屋原ヨリ東ハ七嵐辺ノ村々保福寺マテ、西ハ川手ノ田沢村

筋井川向フ鳥羽村迄都テ十六ヶ村領地セリ、今ニ至リテ田沢ヨリ苧屋原ヘ草苧入相ノ事アルハ、此謂ナリトカヤ、又此辺ノ要害ハ皆弥助持ナリ

苧屋原氏は初め海野氏の一族であったが、その後武蔵の太田道灌の一族が当国に流浪してきて、小笠原氏に仕え大永三年から当城主になって七〇〇貫の所領を与えられ東は七嵐から保福寺、西は川手の田沢村から鳥羽村辺まで都合十六か村を領したとしている。(中略)

この苧屋原城の位置は林城の小笠原氏にとっては東北方を固める要地に当たり、またここに太田氏を配したことは小県の海野氏、更埴の村上氏、筑摩郡嶺間の海野氏、筑北の青柳氏等をおさえるという重要な意味をもっていた。(中略)

武田晴信はこれまで佐久方面から侵攻して幾度か敗北を帰せられた強敵村上氏を攻めるために、まずこの苧屋原城を陥れ、ここを根拠地にして更に小県に出て、後背から村上氏を攻撃し、これを敗走させていることから想像されるであろう。(中略)

ここで注意すべきことは、(『高白斎記』)は塔原城については言及しているが、光・田沢城については一言も触れていないことである。その理由は、ここには会田や塔原のように有力なる城主がいなかったからであり、光・田沢は太田氏の支配下に入り、その出城と化していたことを裏書きするものである。

しかし晴信は苧屋原城を陥落させるためには、大手の苧屋原の正面から攻撃しただけでなく、その搦手である田沢・光の川手筋からも攻撃したに違いない。田沢の寺村にはもと七堂伽藍をもつ寺(注 円満寺)があったが、このとき兵火にかかって焼失したというのはこれを裏書きするものであろう。(中略)

田沢・光の海野氏は室町時代の中期以後その勢力が衰え、戦国時代の初め、小笠原の属太田氏の支配下に入り、武田氏支配時代は塔原氏の支配するところとなったことが知られる。

(『南安曇郡誌 第2巻上』による)

(5)小笠原貞慶による塔原氏誘殺

長いこと武田氏に駆逐されていた小笠原貞慶が深志(松本)に復帰した天正10年(1582)7月以降、越後の上杉景勝に通じる勢力や親武田氏で小笠原をこころよく思わない勢力、謀反が疑われる勢力に攻撃を加えた。

5. 旧仏法寺と周辺の歴史遺産

(1)仏法寺

①七堂伽藍

□犀川は文禄年間の大氾濫で現在の流路に変わるまで、今より西を流れ、仏法寺は平瀬城直下ともいべき位置に七堂伽藍を誇ったが、武田氏の兵火により焼失したという。

②阿弥陀如来座像

□平瀬氏寄子である熊倉氏の栄華

③寶山和尚 仏法寺の中興

(2)熊倉の渡し場(熊倉橋)跡と往時の面影を残す熊倉道

①熊倉橋 十返舎一九『続膝栗毛』第八編上や豊田利忠『善光道名所図会』に熊倉橋の記載。

②熊倉道 千国街道のひとつ

③熊倉番所跡

(3)岩原村宮大工浅川豊八の手になる春日神社本殿

浅川豊八は法蔵寺山門建築に関与している浅川豊八と同一人か不明。立川流と大隅流の違い。

6. 中世都市真々部市の遺構と武田信玄

(1)枳型がない中世都市

(2)七寺八小路の都市構造

①市立 高根市、穂高市、真々部は安曇平の三大市場

②寺の多い都市 七寺と異常に寺が多いが武田信玄にとってこの中世都市の役割は何かとしたときに「宿城」であれば軍事拠点として整合性がとれる。真々部氏の時代、真々部市の町にあった寺は真光寺、金龍寺、専念寺、真行寺の4ヶ寺。

□真々部の寺院一覧

寺名	住吉山 真光寺	金桑山 金龍寺(真珠院)	無量山阿弥陀院 専念寺	大円山 真行寺(東泉坊)	勢至山 円通寺	瑠璃光山 常松寺	仏花山 法国寺
宗派	曹洞宗	臨済宗	浄土宗	浄土真宗	浄土真宗	曹洞宗	曹洞宗
本寺	上州長年寺末	諏訪慈雲寺末	京都知恩院末	南栗林正行寺末			
末寺	真々部 常松寺、中萱法国寺、等々力東龍寺	小宮 龍雲寺、真々部真珠院	六坊 清久院、無量院、恭敬院、了知院、良念院、源周院				
創立	天文7年(1538)or 天文19年(1550)		寛中年中(1460~1465)		文禄元年(1592)	元和2年(1616)	
開山	養室紹舜和尚(永禄7年<1564>示寂)	一庵和尚(寺伝)天桂和尚(慈雲寺記録 永禄11年<1568>示寂)	光連社明誉上人(文明2年<1470>示寂)	釈勝道法師(小笠原氏、永禄11年<1568>示寂)	釈教伝可泉法師(元和元年<1615>示寂)	真光寺4世、大応和尚	真光寺7世名室順誉和尚
開基	真々部尾張守	真々部尾張守					
寺領 除地	太閤 検地	1.5石	3石 (真珠院)	2石	1.2石	1石	

ハ 反 畝 歩 V	慶 安 検 地	屋敷 7.8.15 上田 1.4.27 中田 1.3.24	屋敷 1.4.12 中畑 2.0.15 中畑 2.3.15 下畑 0.9.12	屋敷 3.3.18 上田 5.0.3 下畑 0.7.18 下々畑 1.0.12 寺地 65×85 間	屋敷 2.5.3 上畑 1.5.9 下畑 0.6.12	屋敷 1.5.18 下田 1.4.3 下畑 0.3.21	屋敷 1.1.6	屋敷 0.5.4 田 2.5.28 畑 2.9.17
備考			木曾義昌の 禁制あり	室 町 中 期 の 誕生仏あり		明応年間		真々部氏支 配中萱に有

- 註 1. 常松寺は東方熊倉道沿いに、法興寺は中萱村に存在
2. 真光寺開祖養室紹舜は元亀元年(1570)武田領曹洞宗六寺院の住僧と共に新法度を作って信玄に見せて返信を受けている。
3. 安曇郡の宗教的中心地とするとともに大軍の宿泊できる宿城にしている。

(3)真々部氏居館の遺構と殿村

①居館の構造・規模

- 本郭 金龍寺北の畑地(高家 5813 番地~5814 番地) 45 間四方 土塁跡
- 二の郭 金龍寺の場所
- 三の郭 金龍寺の南に隣接してあった



真々部氏館跡

②居館の主真々部氏とはどのような一族であったか

- 仁科氏の一族か、丸山将監の一族か、諸説あつて確定的なものはない。
- 「真々部氏は、武田信玄の娘婿と伝えられており(『信府統記』)、その初見は元亀四年(1573)の穂高神社所蔵の鷲足膳の銘文で、「真々部内方」とあり、続いて天正八年(1580)の仁科盛信書状で「真々部同心被官」とある」(小穴芳実他『図説・安曇の歴史 上』〈昭和 60 年郷土出版社〉)
- 「真々部氏は鳥羽館の所に掲載した丸山氏の系譜に見られるように、二代目丸山肥後の弟内蔵

助で、『旧南安曇郡誌』所載の小笠原長時の分限帳(信憑性に若干の問題があるが)によれば、「高百十五貫 真々部村城主、真々部内蔵介七騎」(一騎およそ十五貫)とされている。正規の文献では元亀四年(1573)二月吉日の銘をもつ穂高神社所蔵のさぎ足膳裏書で、「願主真々部内方」とある。次に見られる文献は、天正八年(1580)八月十一日仁科盛信(武田五郎)が等々力次右衛門にした書状に「真々部同心被官同前之事」(同心被官を召連れて十九日に当府大町へ参着せよ)とあって、細萱河内守らと共に仁科盛信配下の給人(殿原)として活躍している。/ 真々部(丸山)氏の真々部への来住年代は、鳥羽館の丸山将監のところでも述べるように天文年代以前、15世紀末から16世紀初頃ころと思われるが、丸山氏は日岐氏(生坂)の庶子で、生坂の出身であり、日岐氏と違って仁科氏の親類被官の中に加えられていなかった」

○系譜

(信濃史学会『信濃中世の館跡』〈平成12年信毎書籍出版センター〉)

○「丸に揚羽」紋の意味するところ

①居住空間

○町(上町、中町、下町) 地下人(家来百姓)が住む

○幹線道路

③市

○どのような品物を扱った市立ちがなされたか

○市に不可欠な市神の司祭者による宗教行事はなかったか—「塩」の役割

○真々部の市はどのあたりまで存在したか⇒市屋敷は中町あたりに存在

資料

奉願口上之覚

当村保高いち・高根いち両家の跡目巫女花崎義先月十六日相果候所、相続人無ニ御座一候ニ付、神主井掛宮氏子廿五ヶ村江及ニ相談一候所、往古より有来り候大明神之いちニ有レ之候得者、何卒相続人致ニ詮義一、旧例之通御神事為相勤申度奉レ存候、依レ之相続人詮義中跡式之義御猶被ニ下置、候様奉ニ願上一候、此段宜被ニ仰上一、可レ被レ下候、以上

嘉永二己酉(つちのととり)年七月

成相組真々部村 (連署名部分略)

藤森善太夫殿

④神明社と御田屋(おたや)

○神明社をおく意味

○御田屋(おたや)の役割

⑤寺

○寺の役割と武田信玄の宗教政策—七寺も寺が必要であった訳は何か

⑥堰

○都市建設の第一歩としての「呑堰」開削

真々部呑堰から引水し西町裏堰と東町裏堰としている

東町裏堰は殿村でさらに御田屋裏堰を分岐している

⑦駒飼道

駒飼道の地名は、町並の西方に軍用馬の馬市を開いた「駒垣内」があったことを示す。

7. 吉野郷の史跡

(1)熊野権現社と熊井氏 吉野町東方にある古木ビャクシン・ツルマサキ(樹齢 600 年以上)の脇に熊野権現社があり熊井氏が祭祀する。鎌倉時代に熊井氏が吉野に來住したことが推定されるが、熊井家の記録によると筑摩郡の熊野井(熊井)から來たといい、武田信玄に従って移住したのではとの説もある。

(2)丸山丹後守の堀屋敷

15 世紀の末ころには生坂から移住。代々小笠原氏の家臣平瀬氏に仕え、その忠誠により天正 18 年(1590)に小笠原貞政(のち秀政)から吉野、寺所の両郷において 50 貫文(粃 250 俵)の土地を給与。

(3)吉野町館跡と丸山日岐丹波守

①中世都市吉野町にみる仁科氏から小笠原氏への勢力転換

□旧千国街道に沿う真々部氏(武田氏勢力下仁科系)の真々部市から松本街道に沿う丸山氏(小笠原貞慶勢力下仁科系。臣従を強いられた)の吉野町への「軍略都市機能」の移転。

(4)梶海渡遺跡

県営豊科南部圃場整備事業に伴う発掘調査(平成 3 年)

1506 年～1611 年に吉野梶海渡にあったといわれた法蔵寺の遺構を明らかにしたことは大きな成果。

8. 成相新田宿の遺構と法蔵寺の文化遺産

(1)成相新田宿(のちの豊科市街地)の開設とその後の経過

①芝切 慶長 13 年(1608)、

②宿場の性格・構造 ⇒ 伝馬宿+村立新田成相組唯一の市場

松本藩の交通政策 藩用三大伝馬の荷継、一般伝馬荷の荷継および口銭徴収

上町を成相本村の枝郷成相町村が経営、中町・下町を新田町村が経営

③問屋 事実上、藤森家が独占

④成相町村への親村の干渉

成相町村の鎮守が一応成立したのは明治 15 年に京都八坂神社のスサノオノミコト(牛頭天王)を勧請したときであるが、明治になってからも親村の本村(成相本村、中世の成相郷)の鎮守本村神社の氏子として例祭等の奉仕に徹し、八坂神社では例祭に代わるものとして天王祭りを行う。

⑤市立権の移転

正保年間に大火で焼けた一日市場村(三郷村一日市場)の市場権が元禄年間までに安曇郡南部の市場として整備すべく成相新田へ与えられた。市立のためには宗教行事が必要で、一日市場の宗教者である夷太夫(市神の司祭者)を招く必要があった。市は斎く(いつく)という宗教行事が商いの数少ない機会だったことから発生(和歌森太郎『神ごとの中の日本人』)ということで、市立に市神は不可欠。

慶応年間、衰微した成相新田から市場権を奪還するため、一日市場村は松本藩に対して 350 両を献金して運動した。

(2)法蔵寺の開設と文化遺産

①開設 成相新田宿の旦那寺として慶長 16 年(1611)に吉野村梶海渡から移転。

②歴史文化遺産

❑山門 諏訪の大隅流宮大工伊藤長左衛門矩重の傑作。寛政元年(1789)に完成する。岩原村の宮大工浅川豊八が建築に係わったことが記録に残されている。平成 7 年長野県宝指定。

❑鐘楼門 寛政年間の建築。

❑屋敷構え 旧法蔵寺館跡、一町四方の敷地に堀を巡らす。

❑庫裡 旧安楽寺から穂高・小川家をへて明治後期に移築

❑寛文六年銘の地藏菩薩石像

9. 栗尾街道とその文化的意義

(1)参詣道 江戸後期に物見遊山として観光化した社寺仏閣めぐりの道のひとつ⇒ 栗尾街道の目的地は栗尾山満願寺。地元では新盆の仏を迎えにくための道で新盆には高灯籠をかかげ御霊を迎える。長尾の平福寺に向かう長尾道や下鳥羽村に向かう日光寺道も参詣道。善光寺道(善光寺街道)は最も著名な参詣道といえるが、単に善光寺という寺へ向かうだけでなく「善光寺」という名(近世、「長野」という町名ではない)の門前町に向かう幹線道路。

(2)栗尾山満願寺

(3)十返舎一九『続膝栗毛 第八編上』に成相新田と満願寺が紹介。

10. 近世末期の産業遺産としての拾ヶ堰

(1)江戸時代になって安曇地方になぜ堰の開削がさかんになったか

①藩の新田開発

新切

②既成耕地の水田化

斗代上(畑の水田化)、切添(耕地隣接地の耕地化)

(2)横堰の集大成

①「横堰」は中世までの「縦堰」とどう違うか

安曇平の耕地開発を支えた用水堰はかなりの部分が中世に成立している。これらの堰は梓川や烏川の山つきのあたりに取り入れ口を設け、西から東に、又は西南から北北東へ水を引き高低を利用して等高線に直角に流しているので、縦堰と呼ばれる。流れは比較的早く分流を設けても灌漑面積は狭い。これらは平地部を完全に潤すことができず、扇状地の広大な原野が未開発のまま江戸時代を迎えた。当地方で江戸時代になって登場する横堰は等高線に並行に近く流すものであるが、設計により公平に配水をしやすい。測量技術は高度を要する。水の流れはあまり高低差がない関係で緩慢であるので、揚げ口からは水量による押し流しを用いる。泥が詰まったり水草が生えやすいという欠点がある。

□梓川があてにならない。→ 縦堰ではどうにもならない。

□奈良井川は女鳥羽川、薄川、鎖川等が流れ込む水量豊かな川で、これまでここからの取水は先行する勘左衛門堰があるくらいでありあまり見られなかった。

②代表的な「横堰」とそのあらまし 犀川や木曽川(現奈良井川)からの取水をねらう

□代官見立ての堰

新田堰 矢原堰の当初→のち臼井弥三郎による民意

成相組代官二木勘左衛門による勘左衛門堰

□民意の堰

拾ヶ堰

(3)拾ヶ堰の開削

①なぜひつようだったか

□天明の大飢饉

浅間山大爆発⇒ 頻発する世界規模の火山爆発と冷夏

□柏原村の切実なる願い

矢原沢の水は先行する白金村、矢原村にとられ、水量に限りがあった。

安曇野には水さえあれば水田化できる原野が多く残されていた。

②最初の計画(文化9年<1812>12月)

□大庄屋等々力孫右衛門(柏原村)の家に平倉六郎右衛門(下堀金村作世話役兼堰廻役)と中島輪兵衛(柏原村元庄屋)が集まり相談。養子孫一郎を大庄屋代として松本藩川除方青木所兵衛に交渉させた。当初は梓川原において新田堰と分水。六郎右衛門と輪兵衛が茸採りといつわって小倉御林と養老坂へ行き遠見、通水可能か確認する。

(4)松本藩の下見分(文化10年<1813>11月上旬)

- ①11/1 松本藩川除方笠井金蔵、尾藤小七郎が堰筋の下見に出張。関係村の庄屋に集まってもらい村内の空き地を書き出させた
- ②11/2～11/4 上記役人 2 人が堰筋視察。
- (5)現地調査(文化 11 年<1814>5 月)
- ①白沢民右衛門(等々力町村庄屋)、岡村勘兵衛(吉野村庄屋)、中島輪兵衛、関与一右衛門(柏原村庄屋)、平倉六郎右衛門の 5 人で平瀬村水門へ行き安曇平を見通して現地調査を行う。
- (6)松本藩川除方松野誥右衛門へ説明(文化 12 年<1815>4 月)
- ①関与一右衛門、岡村勘兵衛、平倉六郎右衛門が拾ヶ堰の計画を説明。
- (7)松本藩川除方松野誥右衛門へ墨引説明(文化 12 年<1815>5 月 27 日)
- ①前日完成した図面にもとづき平倉六郎右衛門が説明。
- (8)松本藩側の現地調査(文化 12 年<1815>6 月)
- ①平倉六郎右衛門、中島輪兵衛が釣り竿をもって釣り人姿に身をやつし、松本藩の役人(手代近藤五郎兵衛、松野誥右衛門、同心笠井金蔵、平光賢治)を案内して平瀬南の新車屋下から絵図面のとおりに案内する。
- (9)松本藩役人、中島輪兵衛、平倉六郎右衛門、大工らによる本格的な堰筋測量(文化 12 年 8 月 10 日～8 月 28 日)
- ①8 月 10 日 笠井金蔵、平光賢治が出張(吉野村岡村勘兵衛宅に宿泊)
- ②8 月 11 日～12 日 下平瀬村東堰口、犬飼新田村西車屋堰～梓川原
- ③8 月 13 日 梓川横堀部分(熊倉村川除石積まで)
- ④8 月 14 日 熊倉村川除石積～控川除～飯田村松本道
- ⑤8 月 15 日 上中曽根～下鳥羽村幅
- ⑥8 月 16 日 下鳥羽村南～本村堰との交差点の西
- ⑦8 月 17 日 鳥羽新切北～本村南の中萱村堰終点～勘左衛門堰との交差点～弁次郎橋東
- ⑧8 月 18 日 中萱堰尻～中堀新田村の温堰尻
- ⑨8 月 22 日 中堀西～源内林～上堀～下堀境
- ⑩8 月 23 日 下堀金西松林～西柏原村境道
- ⑪8 月 24 日 前日の測量地点を見直す
- ⑫8 月 25 日 長尾組・保高組境道～古新切北道窪
- ⑬8 月 26 日 久保道～保高村境
- ⑭8 月 27 日 田中村～芝宮堰
- ⑮8 月 28 日 田中村～烏川
- (10)堰筋の測量変更と平瀬揚口(水門)の検討(文化 12 年 9 月 21 日～10 月 10 日)
- (11)堰掛村の決定(文化 12 年 11 月 1 日)
- (12)願い高の書き上げ(文化 12 年 11 月 7 日)
- ①吉野村=200 石、成相町村・新田町村=100 石、上堀金村・下堀金村=120 石、柏原村=300 石、保高村・保高町村=150 石、等々力町村=30 石、矢原村=50 石 計 950 石
- ②5 年以内に目標達成
- (13)杭打ち(文化 12 年 11 月 16 日～11 月 29 日)

(14)出願(文化 12 年 12 月付)

①形式的にはあるが十ヶ村の庄屋、与頭、長百姓連名で保高村大庄屋 等々力孫右衛門、成相組大庄屋 藤森善兵衛、長尾組大庄屋 丸山圓十郎宛 願出書を差出し藩の許可を得た。

②願出書抜粋

「私ども村々田方少々、或いは用水の流末にて水不足の村方もこれ有り候間、町村地内より犬飼新田村地内え相掛り、下平瀬村巾掻き落し、木曾川水を梓川へ引き入れ (中略)、流末烏川え掘り落し候新堰相立て、村々新発斗代上り等仕り候へば、多分御上下の御為に相成るべく候間、右堰路を願ひ上げ奉り候」

(15)工事計画目論見帳(文化 12 年 12 月 21 日付)

(16)工事(文化 13 年)

○工事直前

1 月堰の開削によって潰れる土地の処置について藩と相談。藩内の各組へ人足出役触れ。人足は村々の屋丁割と持高割とによって徴発され長尾組 20,788 人、保高組 16,689 人、成相組 15,635 人、寄人足として上野組 4,602 人、松川組 3,801 人、池田組 5,597 人の計 67,112 人。所要経費は 816 両で、このうち藩から 356 両が補助金として下賜され、400 両が 10 ケ年賦で貸与されている。自前では 60 両を用意した。

経費内訳=工事そのものの諸経費に 760 両。橋・上樋(堰にかかる横断水路)に 50 両。家屋 2 軒移転に 6 両。

①開始(2 月 11 日) ⇒ 上丁場の掘割りと築堤工事

②梓川東までの上丁場完成(2 月 28 日)

③梓川西から勘左衛門堰交差点までの中丁場(2 月 29 日～3 月 13 日)

④烏川までの下丁場の堰筋堀立て完成(3 月 11 日)

⑤水の進行状況確認(3 月 16 日中と下、3 月 26 日までに上も)

⑥堰底高低修正工事(4 月 7 日～4 月 24 日)

⑦梓川横掘り(4 月 25 日) ⇒ 横掘りの区間は 500 間で約 900m。

⑧工事完了(5 月 10 日竣工)

⑨5 月 10 日以降 工事完工後、通水試験をし土地の高低を修築するとともに、各村の井口規定を行い枝堰の工事をして一切完了(ここまでを第 1 期工事とする)

(17)改修工事(文化 14 年)

①文化 14 年 10 月 堰底 4 間を 5 間に広げる工事、土手の補強や浚い掘り等補強工事を行う。

②文化 14 年 11 月 拾ヶ堰筋及び付属の水門が完成。

(18)工事にかかった費用とその拠出方法 ⇒ 表向きは(16)参照。不足 2,000 両を白沢民右衛門(等々力町村庄屋)が私財を投資。

(19)工事にどんな道具を用いたか

①道具:鍬、じょれん、つるはし、もっこ

②資材:三間枅 45 組、二間枅 20 組、長かご(じゃかご)556 組、四尺かご 484 個、最合木 180 本、柳そだ 295 束、ねこだ(ねこむしろ)787 枚、縄 325 把、空俵 447 枚

(20)拾ヶ堰の功労者 顔ぶれと役割 平倉六郎右衛門、中島輪兵衛、等々力孫一郎、岡村勘兵衛、白

沢民右衛門

①下堀作世話役兼堰廻役 測量設計 勘左衛門堰大改修の功労者

②中島輪兵衛(宝暦2年<1752>～天保9年<1838>)

柏原村元庄屋 測量設計 水準器

③等々力孫一郎(宝暦11年<1761>～天保2年<1831>)

保高組大庄屋代役 関係町村の人夫の賦課

④岡村勘兵衛(安永7年<1778>～慶応4年<1868>)

吉野村庄屋 土木・人夫の指導・監督 白沢民右衛門の親戚

⑤白沢民右衛門(寛延2年<1749>～天保3年<1832>)

等々力町村庄屋 会計・賄い 前後2,000両あまりの私財を投入。816両では賄いきれない部分にあてた。

(21)拾ヶ堰開削の効果

①掛り拾ヶ村の水田化の進展

②流れの速い縦堰から流れの緩やかな横堰への転換による使用水温の上昇

③拾ヶ堰による烏川用水の余裕の発生

④通船の登場

⑤道祖神造立の流行

(22)近代以降の拾ヶ堰

①サイフォン(大正9年) 梓川横掘り(横断)による不都合が解消される。

②富田新田への給水工事(昭和35年から38年)

③拾ヶ堰上(第2拾ヶ堰土地改良区70ha)へポンプアップで給水し灌漑開始(昭和37年)

④現在の役割 農業用水路+広域排水路

11. 神代文字碑と赤蓑騒動

(1)この碑の正体 庄屋丸山家で屋敷神として造立。本来、これは庚申塔の一種で「塞神塔」(さえのかみとう)と呼ばれるもの。明治末年「本村中」と刻み、本村本郷の道祖神に転化。

(2)神代文字で刻んだ神の性格と漢字渡来前にありえなかった神代文字

(3)神代文字碑造立の意味 小谷騒動(赤蓑騒動)の犠牲者の鎮魂の碑